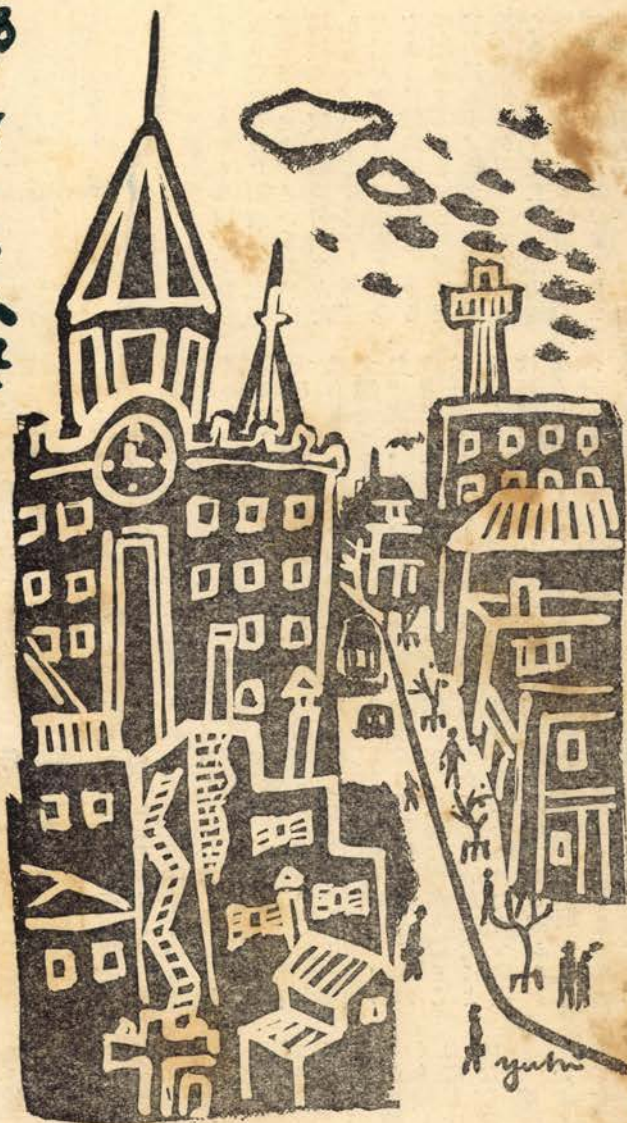


川
柳
の
旅
記

麻生路郎 ☆ 主筆

Pensoj flugas trans la laud-limon
The Senryu Zasshi



十一月號
No.282

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年十二月一日發行第五卷第一號
（每月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百八十二號



門縁大の前駅削弓の迎歓人柳川★

影撮氏布乃志中山

路郎師の句碑を記念する

西日本山柳大会

柳壇の巨星弓削に集る

句碑は作家個人を記念するといふだけでなく、川柳を知らない人たちも、何かの機会に句碑を見、句碑に彫られた句を眺むことによつて文化の道しるべとなる場合も多いであらう。その意味で、句碑の建設は一つの文化運動である。(路郎師の謝辭の中から)

通路に小さくなつて割り込むといふ有様、さて乗り換えの一行がどうなるか、氣が氣でない。発車間際になつてホームへ一番に駆け上つて來たのは、なんと青年の如き路郎先生だつた。師の颯爽たる若々しさに一同歓声をあげる。つづいて花の如き梨里さんの姿が見える。あたりは急に明るくなつた。それもそのはず、豆秋さんに加えて緑雨さんの登場で、二万燭光ぐらいの偉大なる光明(オツムのことではありませんよ、柳界を照らす燭光)を発見したのであつた。文蝶、淡舟、正則、博也の諸氏も一緒である。辛党の娛句樂さんが出した甘いまんじゅうを頬張りながら、一行は路郎師を囲み、日本一のガタノ、汽車で日本一の川柳町へ向う……それは恩師麻生路郎先生の句碑建設記念第

二回西日本山柳大会(九月十七日)の前日午後三時半から同七時ごろまでの一コマである。

汗の奉仕

弓削駅に着くと、弓削平さんを先頭に、七面山、笑泉、鉄兒、富至、十九平の諸氏ははじめ大ぜいの柳人たちが構内狭きまでに迎えている。みんな眼は輝いているが、風体が一寸異様である。どうしたのかと思えば、この日句碑の周囲に土を運び、樹を植え、草を配して美しい築山を作り、駅前に綺麗な緑のアーチを建てた。それを柳人たちの奉仕で完成したばかりのところだつた。感激的な奉仕による汗と泥にまみれたまゝの出迎えだつたのである。シルクハット燕尾服の出迎えよりも、温い血の交流する師弟の情愛である。恩師路郎先生の

遠來の參會者

いよ／＼晴れの大会当日となつた。開会前早くも鳥取の八歩、日満子両氏ら一行が到

青年路郎師

もうそろ／＼路郎先生の汽車が着く頃だ。岡山駅の乗客係室へ出かける、主任の久米雄氏と対談しているのは大阪からの一番乗りである豆秋さんだつた。一寸商用があつたので一足先きに來ました。と、初対面から百年の知己を思わせる豆秋さんである。間もなくホームに入つた下り列車からは娛句樂さんがひよつこり現われただけで、路郎先生らしい姿は一向に見当らない。それではこの次の汽車だ。そうすれば乗り換えに僅

か四分しかない。万一の場合、津山線の発車を遅らせようではないかと娛句樂さんが提案する。ようやく戦前の正確を取り戻しかけた國鉄の発車時間を遅らせようというのが山陽線熊山駅長の娛句樂さんだから驚く、それも少し無茶な話だといふので乗換えを急ぐように拡声器で放送をする手配をすることにし、明日出發の風來子、忠美の両君が乗換えの先導を引受けてくれることになり、私たちは津山線で座席を占拠する計画をたてた。ところがこれはまんまと失敗、座席どころか、満員の

弓削平氏の開会の辞、在里弓削町長の來賓祝辞ののち路郎師の「熱の弓削」と題する講演をきいたのち、香林、亞鈍両氏をはじめ各方面からの祝電、祝文を披露して、いよいよ披露に入る。満場悲喜交々の顔、々、々。場外は珍らしく沛然たる大雨。かくて総合得点は白柳子（津山）豆秋（大阪）八歩（鳥取）北星（岡山）博也（大阪）鮎美（大阪）生々（大阪）生々（大阪）滝庵（大阪）青年（岡山）青紅（津山）梨里（大阪）の諸氏がベスト・テンに

入り、第一位には岡山縣知事賞、第一位より三位までには、山陽新聞社賞が授與されて、めでたく大会を終つた。空はまたいっししか晴れてきた。

秋空に浮かぶ句碑

午後四時から弓削駅前の句碑除幕式である。神官の祝詞奏上のもち弓削平氏令嬢の可愛らしいお手々で、さつと

空はもちたえ、路郎師の終るを待つように篠つく大雨は再び降りしきる。一同駅構内に雨を避け、すぐ次の汽車で帰阪する生々庵博士、もう一晩弓削へごどまる路郎師はごもに駅長室に入つてしばし小憩、路郎師は生々庵博士をつかまえて、

雨が急に小降りとなり、列車の遠ざかり行く音とともに青い空が見え出した。路郎師は口笛でも吹きたい面持で、夕立が滯めてくれた道をゆく

と形容したくなるほど、軽いステップで宿舎へ向つたのであつた。（藤本満年記）

表紙……………由比種三郎

路郎師の句碑を記念する西日本川柳大會
大會に列席して
藤本 湧年……(三)

出
五

夜汽車

雨男の

川柳の弓削

弓削の女性と

川柳大会の三

本
壯

あ
の
頭
の
人
々

走器直上古川柳

從然草と古川村

風 塵 土 土 塵 土

訪史川樓に二

柳人往來

座談「弓削の一夜」

其

窓口・何碑と利

古川柳と歌舞伎

一、

柳 培

近
作
柳
樓

各地柳壇

課題吟「耳」

附錄二(四)

編輯室にて

10

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

出 發

土井 文 蝶

十六日零時五十分大阪発で出発の柳人は縁雨、淡舟、正則、博也の諸氏と僕の五人。大阪駅へ聴けつけたのが三十分前、やがて改札がはじまる、ごや／＼ホームへ出たとたん、あつ先生が向ふに居られますと淡舟君の声、一同ざつと歎息を上げる。そして先生と共に和かに乗車した。

今日は特に梨里さんが美しく晴やかだ。幸ひ列車は大阪仕立がらんと空いて居るのも嬉しかった。

てし席列に会大

今日は小松園氏が居ないのでちと淋しい。秋の陽はつるべ落じとか夕間迫る頃岡山縣に着く岡山柳界の重鎮田久米雄氏と瀧年、娘句樂の諸氏に迎えられて弓削行に乗かへた。支線の汽車は、がつたんごつとん、豆秋氏「これほんまに汽車に乗つた気分が出るな」「そや／＼と僕が合槌を打つ。

夜汽車で

水 谷 鮎 美

▼九月十六日、二十時二十一分に乗車するべく大阪駅に往く。北海、栗、志乃布の諸君が待つてゐた。夜汽車はウキスキと柳談で、一時二十分岡山駅に着く、駅前の旅

館で朝までを憩ふ。翌朝、七時十九分発の津山行に乗込む。風来子、淑郎氏が名刺交換のトツテであつた。車内の向ふ三軒隣、その外にも句帖とペンを持つ柳人ばかり、弓削へ／＼と車内句会は前進する。

▼鳥取・津山・岡山・高松・大阪その他の各地から柳人が参席されている。還句をしながらもちよい／＼その方へ眼をやる。騒音はなく柳談を交されたる。司会者十九平氏は進行に大當。

▼大会を終了した柳人達は三々伍伍と歩るいて弓削駅頭句碑の除幕式に臨んだ。

雨男の記

中 島 生 々 庵

雨男と自他共に許してから約四十年になる。それが川維六月号の座談会で偶然の事から路郎先生の晴れ男と張り合ひになり柳友諸子の評判になつて終つた。その頃は已に今度の西日本川柳大会へ出席と決つて居たので、若し大雨に降れば地元弓削町の方へは勿論遠路参会される柳友の方々へ相すまぬと内心の弱い雨男氏大いに心痛して居た。ところが、十六日宅を出る頃は大雨。暗い心持ちで岡山に着いた頃は晴れて居たが、翌朝津山ゆきの汽車に乗る前に又一雨、汽車が動き出す頃には陽がさし込んで来る。い／＼／＼せざるを得ない。弓削駅に着いてホームと駅頭の装飾、緑の歓迎アーチをくぐつて町全体川柳色に塗りつぶされて居るのに、日を丸くし

ながらもやはり雲つた空が氣にかかる。会場に着いて一服するとボツリ／＼降り出して、路郎先生や先着の人達にひやかされるのが人こそ知られ切られる思ひ。然し晴れ男の先生の存在が時々雲を切らして陽さしえ入り込む。定刻十時会場は文字通りの超満員で、その元氣さは雨等大して氣にして居ない風景が誠に有難い。二時過私の選の被講者は大分降つて居る。この後四時から句碑除幕式は是非晴れる様に祈る心がしきりに動く。こゝで晴れ男が又々雲を散らして呉れて傘なしで芽出度式が進められる。然し私が玉串を獻げる頃ともなれば何処からとなく雲が集り、私の心臓が高鳴りを始める。最後に先生の謝辞がゆつくり述べられる如何にも晴れ男の自信たつぷりである。あな不思議式終了と聞一變、車輪を流がす大雨雷鳴さえ交る。参会者の二百の目は期せずして私に集る。駅長室で休まして貰つて居る間にも、益々降りしきり、さん／＼ひやかされ、列車到着と見るや逃げる様に乗り込んで発車する。あな不思議がまだ残つて居た。五分間もたぬに晴れ上つて終つて汽車を見送つて下さつた路郎先生一行は、傘もささずに宿に歸られた由。路郎先生と生々庵の顔を立てたんだと、皆様は云はれるが、それにしても神様少々現金すぎる。この雨で助かりました句碑の周りの植木がしつかりしまりますと、地元の委員さんに慰めて頂く。帰途今日、一日の走馬燈を廻はし乍らあの盛んだつた川柳大会の余情を味つて見る。雨男もあれ位の程度だつたら寧ろ効果的だつたかと自惚れても見た。

川柳の弓削町

福 島 正 則

いかに人生即川柳で有るか、私はそれを、川柳の町、弓削で教へられた。九月十六日午後七時十八分弓削駅に着いた。路郎先生、梨里氏、縁雨氏、豆秋氏、文蝶氏等が駅長室に案内され小憩した。直ぐ宿へ出発するので、淡舟氏、博也氏、私等は立つて居た。その小憩が偶か五分間程であるにも拘らず、待合室の重い／＼長椅子を下さつた。此れは些細な事かも知れないが、私には深い第一印象であつた。先生の「生命の有る句を作れ」を実践する眞剣な態度、それが日常茶飯事の一端にも現はれて来なければならぬ事を、反省させられたのだつた。

上り下りの両プラットフォーム、駅の中央の天井に、大きな川柳行燈が吊るされ、駅玄関は万國旗に飾られ、駅前廣場は、除幕式を待つ路郎先生の句碑が白布に覆はれて田舎の築山に、將に暮れた宵明りに響いている。横手には堂々とアーチが建てられて、一行は胸熱くその下を抜けて宿舎の、二葉亭に案内された。川柳の町、弓削に一步を印してより、眼に見るもの、一つとして川柳以外の何物とも無いこの光景に、私は川柳即生活で有る此の土地が無上と羨しく、仮令一日でも弓削町の空氣を呼吸出来た幸福に、私は一人ひそかに、二葉亭へ向ふ弓削銀座通りで、思ひ切り深呼吸を繰返し乍ら一行の後に続いた。

男女両性に作用する

プレホルモン

塩 野 義 製 薬 皮下注射・錠劑



SINOGI

を出した一家族。差向ひで食ふ夫婦。私は隣組の松茸狩りを連想していた。川柳が絶えてある弓削の町川柳と共に苦楽。人生即川柳の生活で、己れだけでなしに、妻も子も老父母も孫まで、否町に住む全部が、川柳生活、川柳社会を目指して暮す。これこそ縣の誇り、日本の誇りではないだろうか。その社会は当然明朗に潤ち潤ち親身に通る人情が到る処に溢れているのである。

俄雨も晴れて緑滴の大アーチを仰いで、可愛い、弓削平氏のお嬢さんに、路郎先生の句碑の幕は取つて除かれた。祝詞を奏する、神官の一人眞剣な額には玉の汗が光っている。町長さんの玉串捧呈等々、町を挙げての情熱に答へて、弓削路郎先生の御挨拶に、今は暖い一瞬の駅前前なる句碑除幕式場は感激のルツボであった。

弓削町の女性と川柳

麻生 梨里

九月十六日の夕弓削駅に着いた私達の一行は、支部の方々の案内で、二葉旅館に到着した。此処の仲居さんは丸顔の親切な方で、「座敷の門を閉ざした午前二時」(初子)の句を過般この地の句会で残された方ださうである。平素と麗しで親しんでゐる遠地の柳人達と賑やかに柳談を交し旅の夜の一時を過ぎた。汗と汽車の煤を洗ひ落して浴衣がけの晩食を済ました後も夜の更けるの知らずに語り合ふ人々の顔には、旅の疲れなど見られなかった。最近川柳塔で活躍して居られる茶々さんに初めてお目に掛つて、川柳の四方山話

をした。茶々さんは小柄の美しい婦人で、満年さんの奥さんだ。句もなか／＼御主人に負けない見付処の細かさと、実感の句を残して居られる。女の句は何と言つても見付処のこまかさがものを言う。と言ふのは人世の経験に於いては男の比ではないから、同じ方向から作句すれば必ず負ける。女は女らしい見付処を狙ひたいものだ。婦人句会の指導をして居られる久米女さんは見るから温厚な方で、日

知つてゐる或る奥さんは現在四つが五つになる子供があるが、髪にリボン結びビシンのセーターを着た家は十七、八才の女学生そのまゝだ。私はこの人のことを何時も考へさせられる。この人は「世帯染みたくない」と言はれるさうだが、世帯染みないことはリボン結びで生活環境や年輪的な不調和による美の破壊を知らぬと言はれねばならない。奥さんは奥さんらしい、

その人の生活が随分で押して行く処の生活であつては何にもならない。常に求め、常に新しく生きることが一番大切なことなのだ。それが読書、生花、手藝、文学等の趣味を持つことでもよいし、或は直接より良い家庭を築くための設計でもよい。その目的とする処は違つてゐても、我々が常に一歩前進する処に、生々とした新鮮味が保つてゐるのではないかと思ふ。

然しこう言

うことは、言ひ易く行い難いことかも知れないが、弓削町の婦人が夫の趣味を共に楽しむ、川柳を通じて、前進しようと意欲の盛んなことに深く教えられた。形式に因はれた現代女性、道徳を軽んじ、無軌道であること

が、新しいことのやうに誤解してゐる、所謂近代女性性然?とした戦後派の若い大衆は、近い将来に於いて破壊を意味する行動が、如何に新らしい味がないかと言ふことを知らないのに比して、この一歩、一歩の美しい、それは明日も明後日も、約束されたもの前進を続けられる、弓削町の婦人に限りない、新鮮味を感じた。

奉仕

麻生 路郎

ごやらの歌碑は何十万の建設資金を募集したが、金があつたらぬので立ち消えになつたと云う話を聞かされたが、弓削駅前の句碑は建設が決議されると同時に、快速調で出来上つてしまつた。石を運ぶ、土を運ぶ、樹木を運ぶ、すべてが奉仕である。延べにすれば大したものだ。トラックまでが奉仕であつた。この町の字引には、道義の類語と云ふ文字はないらしい。自ら進んで奉仕されたのである。句碑の前に立つた私は、ただ有難さに涙がこぼれた。

川柳大會の三才

須崎 豆秋

(天) 雨男、晴れ男
句碑除幕式で晴れ男、路郎師の謝辞が終わると同時に、ザーツと降り出したので、次に「万才三唱」の音頭をとる役目だった雨男、生々庵氏は棟下へ逃げ込んで、感心しながら雨を眺めていた。

(地) がいせん門

川柳会のためにアーチを建てたのは、おそらく、日本歴史初まつて以来のことでしょう。実にドギモを抜かれました。

(人) 十九平さんの司会
むかし日本ではたら、今頃は中將閣下位になつていられるお方だけに、実に勿体ないほどの堂々たる司会者でとた。



路郎句碑 俺に似よおれに似るなご子をおもひ

志乃布氏撮影



堺市 中島生々庵

たはされた塀の内らの暮し向き
子猫ぞろ／＼みな宿命の顔かたち

鳥取市 大西八歩

百円のバナ、も食べた指定犯
逢ひに行く金の工面にあるスリル

横濱市 福田山雨楼

博覧会跡に人なく夏の草
廣莊な高台少年院が建ち

婦人朝日のグラビア版え團子鼻
ボinasを落し酒癖まだ止まず

東京都 前山北海

議員選後雑感

我が党の公約知らず名乗上げ
抜声機候補の名のみ繰返し

追込のメガの声皆かすれ来る
輪タタで祇園も廻る前府知事

大臣へ醜聞擲擧の彌次が飛び
「トラ大臣」天下晴れての杯を挙げ

布哇 内藤草一郎

失業者同志ダンスの教習所
そうなのかあれがあいつの二号かい

家附きに貰ふバス賃煙草銭

尼崎市 水谷鮎美

シエーン颱風

鮎なますセイゴが家で掬へる日
子のすきな大学帽が濡れており

美化すればヴェニスとなつた夜の街

大阪市 村松夢裡

誤解解く話が中座計りする
憔悴のやつぱり金が欲しい顔

後家どほす氣かは知らねど丸い乳
殺されてみたいと女の目が笑ひ

太田市 福田安夢

また一人くわへて帰る四疊半

奈良縣 西垣錦風

末弟留雄死去

納棺を済まして雨の降るを知り
甘党と聞いて女房の愛想よし

買へ／＼と迫るばかりにラヂオ鳴り
そのあした特價いくらの服でくる

丹精の髭も落して闇屋する
さし上げて孫に鼻先蹴られたり

正直に話し借金ことわられ
つくねんど金利の正体考へる

金つまずき先づロータリー脱会か
ストに勝ち暮し一向樂でなし

米子市 三鴨美笑

むし返すほどのたのしい恋でなし
再婚の肚がきまつて厚化粧

マスターがうるさしこの店縁がなし
使ふ身と使はれる身の差を忘れ

支那服で通した頃の夏を恋ふ
妻達者粗末に使ふ事に馴れ

獸心へ素直に恩は恩で謝し
叱るのが下手はつとけばつけ上り

予期してた計報ながらも寂し朝

庸司君逝く

大阪市 市場没食子

驚いた事に兒が親の年を訊く
人格を無視しておでん屋へ誘ふ

すだれ疊めば秋は窓から飛込んだ
蟬が鳴くさへ淋しきものよ兒が死ねば

教員の或はえぱり或はへつらふ
橋筋へ出て電車迄酔うたふり

ふんざんと席を蹴つたがだれも止めない
映画なら伴奏がある兒の危篤

大阪市 木下幽王

名古屋市 吉田水車

ナイロンのハンドバックに足袋を入れ
當ひくき母の寝姿氣にかゝり

大阪市 須崎豆秋

シエーン颱風

颱風にラジオも氣絶したまんま
街路樹のすぐ降参をして倒れ

皮膚病の如くに互割がれたり

兵庫縣 北川春巢

外交のデツカイ万年筆を持ち
おさらいの三味へワンピースで坐り

泣き上戸とは知らないですゝめ過ぎ
白髪染洗えば孫にこわがられ

レコードを疊に聴かす新世帯
貰ひ火の貰俺より良いのなり

夏物一掃儲けますとは書いていず
研究室競輪の話寒く聞く

雨の箕面水は濁つてゐるけれど
岡山縣 大森風來子

弁当の汁がついてる趣味の本
つゝましく生きんがためのトースパン

洋食の皿の数ほど見合をし
番傘を置いて娘は濡れて去に

驚いた事に兒が親の年を訊く
人格を無視しておでん屋へ誘ふ

すだれ疊めば秋は窓から飛込んだ
蟬が鳴くさへ淋しきものよ兒が死ねば

教員の或はえぱり或はへつらふ
橋筋へ出て電車迄酔うたふり

ふんざんと席を蹴つたがだれも止めない
映画なら伴奏がある兒の危篤

大阪市 木下幽王

名古屋市 吉田水車

ナイロンのハンドバックに足袋を入れ
當ひくき母の寝姿氣にかゝり

大阪市 須崎豆秋

シエーン颱風

颱風にラジオも氣絶したまんま
街路樹のすぐ降参をして倒れ

皮膚病の如くに互割がれたり

兵庫縣 北川春巢

外交のデツカイ万年筆を持ち
おさらいの三味へワンピースで坐り

泣き上戸とは知らないですゝめ過ぎ
白髪染洗えば孫にこわがられ

レコードを疊に聴かす新世帯
貰ひ火の貰俺より良いのなり

夏物一掃儲けますとは書いていず
研究室競輪の話寒く聞く

雨の箕面水は濁つてゐるけれど
岡山縣 大森風來子

弁当の汁がついてる趣味の本
つゝましく生きんがためのトースパン

洋食の皿の数ほど見合をし
番傘を置いて娘は濡れて去に

驚いた事に兒が親の年を訊く
人格を無視しておでん屋へ誘ふ

すだれ疊めば秋は窓から飛込んだ
蟬が鳴くさへ淋しきものよ兒が死ねば

教員の或はえぱり或はへつらふ
橋筋へ出て電車迄酔うたふり

ふんざんと席を蹴つたがだれも止めない
映画なら伴奏がある兒の危篤



大阪府 新川 博也
本あさるゆとりうれしきくらしむき
抱負などつぶされてゆく街の音

大阪府 水谷 竹莊
はつきりと別れ薄情者にされ
女難だすましておれの妬かれよう

山口縣 弘津 柳慶
失物へ皆んなへあたり散らすなり
僕がいた所も北鮮侵入し

下関市 國弘 半休門
電報が濡れてさうした俄か雨
佛間まで開つ放したこの残暑

兵庫縣 小沢 史葉
学生の戦後派同志よく儲け
脱税の一割だけを吞ましとき

兵庫縣 小西 無鬼
次に來たものははつきり誠首だつた
赤追放へ社の強い事強い事

大阪府 吉田 斜水
配給があつたか白い飯が待ち
失業の目にバーティーの派手なピラ

布施市 糸本 醉月
税務署へ幽霊出ぬが不思議なり
泳げない同士が山へ避暑に行き

岡山縣 山分 淑郎
古ぼけた聖書で吾れは甦り
人生の遊戯戦後派結婚し

約束を守らぬ事の平氣な娘
此処からは他人の顔で家近し
ゴムまりがギブスの子からまた逃げた

大阪府 種瓜 平

ハツ手の葉あなたのおまえとゆれている

大阪府 福島 正則
珠数までを付けた不幸な貸衣裳
終発の両のポケットの花名刺

大阪府 富岡 淡舟
尼の胸少女の頃の乳房なり
卒業が近く煮焚をさせられる

奈良縣 飯降 白香
死ぬ心算など恋愛技巧なり
末席で下戸はだまつて壽司を喰べ

奈良縣 西辻 竹青
茶碗の音箸の音味喰汁すふ音にきやうだ
情熱を買はれ寄合には上座

山口縣 長野 井蛙
銀婚の妻抱き上げてもらえす
榮枯盛衰俺は矢張り下り坂

山口縣 長野 井蛙
乳母車茨の道はまだ知らず
けち付けたとかで姉さんちと暴れ

呉市 林野 甦光
サンダル爪先軽いあけび籠
半帖を首筋へ聞くかぶりつき

大阪府 竹田 芦穂
來週の予定に更ける山の家
近づけば牧歌を唱ふ髭男

大阪府 上田 春柳
肺でつしやるかと夏やせ氣にしている
新婚の夢を辿りて

大阪府 麻生 梨里
猫にまで氣兼ねしてた頃の嫁
ライバルへはくえむそれも教養か

ガラス製品のやうな一人つ子を抱き
ダンス水屋ガク鳴らしてスロークイック
リズムミカルに歩きたしこの街の灯に

布施市 森下 愛論
洗濯をする間ダンスへ子をくゝり
世話妬ける人ださ女婚しがり

尼崎市 靜岡 忠八
それからは女の度胸にひきづられ
正義感それが会社への氣にくわす

大阪府 松江 梅里
善惡を卒直に言ふ程に酔ひ
卒直に言ふのに刑事承知せず

ハイカーヘラムネは派手に音をたて
不渡りを出してスクーター乗りまわし
洋装の美より浴衣の情が好き

ハイヒール男であつた旭町
えゝ恋をしませう二人腕を組み
澄してるけれどもあの娘は僕がすぎ

了解を求めすキツスして欲しい
その人の叱り方迄氣に入つて
白米の魅力操をすてさせて

ストもなく賃上げもなく水車
この暑さお隣の長唄まだ続く
労働攻勢に出ようとくつわ虫が啼き

宇部市 上林 粗影
十字架を胸に異國の母を恋ひ
顔役に氣嫌さらせるまでに讀ち

兵庫縣 石岡 正司
食卓の廣さも丁度差向い
鳥取市 河村 日満子

嘘に嘘加へて恥をかゝせない
僕自身善人だとは言ひきれず
儂の顔がまともに見えぬかと叱る

そんな子はうちに要らない怒りやう
死を悟る人の言葉の静かなり



暴れるとて今夜の寢間を入れ替はり
飲み過ぎたこと何日までも言ふならん

兵庫縣 家 沢 薺 花

妻に手を貸す谷川の石づたい

すれちこてばかりケール今日も暮れ

弟に彼氏が好きか訊いてみた

音の良いおなら乳呑む兒も笑ひ

滋賀縣 黄 瀬 美 秋

ラブレター誤字が続いて間が抜ける

あの人のためとは言えぬ髪を結い

見合では淑やか過ぎるほどに見え

酒の上のキッスを女足場に

先輩と知れて税吏の折れて来る

岡山市 藤 本 満 年

席譲ることを忘れたほど美人

肉体は熟れてるという見合いをし

切り札はまだ肉体を賣る手あり

お化粧の香を振り撒いて傘はゆく

儲りそうな株を藝者に教えられ

服の型語りつ娘桑を摘む

熊本縣 西 口 如 川

飼主の前とも知らず大を追ひ

パン／＼に愛人らしく振舞はれ

愛人え話す話を探しとき

岡山縣 福 島 鉄 兒

勳章の有難かつたを子にきかせ

蚊と共に乗つた支線の終列車

素裸が居るので女這入りかね

岡山縣 直 原 湖 月

手紙にはいとも元氣で入院し

慾ばつた夢の中から子は育ち

岡山市 藤 本 茶 々

病氣まで仲よくすると娘があきれ

虹のような恋をしていた日記帳

師を迎えた／＼とおろ／＼と立廻り

よし／＼と撫で／＼呉れそな師のお顔

万才屋ほんとの喧嘩も一寸演り

大阪市 福 本 剛 骨

歌舞伎座へ親は娘を觀せに行き

グッドバイ彼女は後も振り向かず

船弁慶お経ですかとのぞかれる

文学が好きです半七捕物帖

つれ／＼にまた恋愛をいたし候

池田市 太 田 木 声

停年退職今日から犬をひき

兵庫縣 榎 南 夏 六

どこへ行く僕の空想乗せた雲

うらぶれし一杯のビールへ嘘を云ふ

大阪市 伊 藤 迷 宮

来るものが来たと思えど市民税

ボーイフレンドですと絵封筒悪びれず

カーテンのようなスカート翻えし

兵庫縣 小 島 無 聖

淡々と見あかぬ山に育てられ

耳うちが抱かれる型になつていた

岡山縣 高 山 朗 笑

誰にでも媚る女に腹が立ち

嫌いだと言えばその癖をををかき

片道のキツプ人生の春をゆく

岡山縣 杉 山 一 貫

草刈りにゆつくり逃げるきりぎりす

思い切り團扇の蔭で欠伸する

横車生命迄は賭していす

文盲がめくり過したカレンダー

岡山縣 服 部 十 九 平

夏草の底に沈んでレール錆び

元將校休めの姿勢で立話

負けた恭を子供が泣いたせいに

一年生の様に電光ニユース読み

オッパイをたゞ見ただけのストリップ

思ふ様結べぬ帯に母を恋ひ

岡山縣 大 森 娛 句 樂

榮轉の汽車は山田を後に揺れ

挨拶へそうですかと手をもまれ

西宮市 田 辺 由 布

誰が飲むとこかお茶屋の高い塀

サラリーで飲めぬビールの泡あふれ

ゴミ箱へゆんべが匂う法善寺

今日生きる道はあるなりモク拾い

大阪府 荒 木 哲 水

検札へお國訛りをちよつと出し

大分縣 桑 原 表 情

稲妻に蜘蛛の子と散るブルーの兒

ホームラン母と姉妹は信用せず

ソロバンも料理も下手でよくつかへ

大阪市 山 中 志 乃 布

令嬢の藝が役立つ引揚者

想いつく歩けど言はぬ御堂筋

金沢市 安 川 久 留 美

孫死んでからの頑くな持て余し

満ち足りた訳ではないが眠むい眠むい

我影の壁から不意に蜘蛛歩く

松山市 前 田 伍 健

煮えつまる鍋へペン先捨てゝ立ち

こげくさいなど夕涼みあわてたり

大阪市 橋 本 緑 雨



詠史川柳

につぽん (三)

戸田古方

古代社會 (續)

(十一) 盟神探湯

氏族制度の末期の様相はいよいよ色濃くなつてゆく。貴族同志と貴族奴隸の斗争、くがたちは氏族のみだれを正すため熱湯の中へ手を突込んで眞偽を定める。

くがたちの用意が出来た油照り

ボロ口とめつこを入れる糸圖

湯起請へ心をみつめ手を見つめ

(十二) 文 字

正式に儒教の傳來するまでも漢字を知つていた人は可成あつたことだらう。儒教も佛教も日本を井戸の中から出すに役立った。

漢字の興味恋のことばをかいでみる
字のかける男で小さい出世する

博覽強記單語帳など考えず

(十三) 崇佛排佛

佛教が好きのさらいのといふよりも、世間に通用するか、ひざりよがりのへんくつもので止るかという問題である。聖德太子と三蔵の管理をしていた蘇我氏が前者を代表して時代の流れに乗つた。

(十四) 十七條憲法

聖德太子側の勝利、佛教主義による理想國家の夢は先ず以和爲貴、篤敬三宝を標榜する十七條憲法となる。

實問え太子慈顔をわけ給い
御說法難摩尊者に似ておわし
オブラート呑んでほしいのは
中味

(十五) 遣唐使

間もなく遣唐使と相手の名前にかわるが平和的修交であることには変りはない。大國

と小國との間、対等の交際がどの程度まで出来たかは疑問。

あちら語も一寸喋つた天王寺
ほんとうの腹は眞似たいことばかり

(十六) 法隆寺

美しき理想は藝術に華開いて飛鳥時代となる。法隆寺には一千三百年前の遺構をそのままのこしてゐる。

古拙の笑臉待はいつも立つた
まゝ

この辺で太子迎えた漢織
法隆寺昔のまゝの柿がなり

(十七) 辛酉の年

二千六百何年という年号の数え方は大陸から曆が將來された時にこしらえたものである。日本紀元の定説はまだ出来てないが、大體西紀と同じ古さと考えてよさそうである。

史観ますかえて歴史にある至み
日本人のかゝないものを先づ
信じ

忠孝へ歴史理窟をつけたがり

(十八) 大津京

聖德太子薨後眼にあまる蘇我氏を最後の最大氏族として旧体制の残滓はこゝに一應一掃され大化の改新が行われる。だが古きになれた人々はおいそれと新政にしたがいがねた。

黒幕にすらりと唐の新帝朝
クーデター入鹿の血痕などは
消し

旧勢力搾取は都をかえてする

(十九) おゝみたから

民を愛することばか、民を愛せざることを疑問である。今まで強大氏族に分割圧迫されていた人民は天皇という一人の飼ひ主に統一されただけで、天皇一人奴隸億兆の体制が出来上つた。

おゝみたからごつちにしても
搾取され
大君はいよいよ神になり給い

防人の矢玉は自分でこしらえる

(二十) 斑田收受

非民主的な統治關係さへなければ立派な共産制である。大陸の井田法、口分田をまねたものだが、夢は夢で実行は頗る困難であつた。

正直にすれば役人でもやせる
何のかんのと私田ふえてゆき
出挙ほんにと要るのはほつと
かれ

(註) 出挙は國營の民間金融

添削・批評を希望せられる方は左記小規により至急申込まれたい。

☆入会希望者は住所、氏名、雅号職業、生年月日記入の上申込む事

☆作品は、一人一回五句(会費同封)

☆会費一回 百円(二円郵便切手代用可)

☆添削原稿返送用の封筒に宛名を記載し切手を添付しおく事

☆講師指名のこと(指名のない場合は各所で適当に処理)

☆講師
麻生霞乃先生 福田山雨樓先生
須柳豆秋先生 水谷鮎美先生

申込所 川柳雜誌社内

添削會
會員募集

添削會

川柳雜誌社
川柳添削會



坐 談 弓削の一夜

——路郎師を囲んで——

弓削平 本日は先生の名句を弓削の町に建てる事が出来まして、それを記念する西日本川柳大会も予期以上の成績を得ましたことは、川柳町の皆さんの努力もさることながら、日頃の先生の御徳によるものと思ひます。先生をお迎へしたこの機会に先生を中心にし、まして皆様和氣相需々と柳談に花を咲かせよう。平素から色々考えてゐることを先生に質問して自由活潑に御意見を述べて下さい。満年さんから一つ……

ねばならぬ希望を持つてゐますが毎月先生にお目にかかる訳には行きません。先生は川柳に對する一般的な注意として窓口欄をお書きになつておられますが、窓口欄を注意深く讀むことが大切な役割を果すと思ひます。そのことに依つて先生ご何時も面と向つてゐるやうな氣がいたしますのでこの点を皆様にも希望します。

路郎 私も窓口はそんな意味で書き續けてゐる。今満年さんが言はれた様に度々諸君にお目にかかる機会が少ないうので窓口欄は必ずお讀み下さる様にお願ひしておきます。弓削平「川柳」の誌上で私達に最も魅力のあるのは句の批評欄であるのですが批評欄に就いて皆さんの御感想がありますれば述べて頂きたい。

七面山 句の批評は句主の氣持を離れて第三者の立場から各人各様の批評をなされていきます。果して句主はどのような

な氣持で句を作句したかと言ふことは問題外視されてゐるやうに考えられますが、それでいゝのかどうかと言ふことに對して多少疑問を持つて居ります。句主の立場はあまり考慮に入らずに句評をそのまま受取つていゝかどうか、御意見をお訊きしたいと思ひます。

路郎 句を評する場合に句主が何を言はんとしているかと言ふことは一應誰もが考えなければならぬことであります。然し批評もまた創作なりと言ふ点から考へてみますれば批評家がその句に對して句主の氣持を付度せずには表わされた表現そのものを自己が感ずるがまゝに批評しても、それは差支えないと考えられるのであります。これが添削でありまた場合は句主の何を言はんとしているかと言ふことを外にして添削すると言ふ手はないのであります。然し添削でなくて批評の場合には各人各様それは自由に批評する処に、句主も句主以外の人達も得る処があると思われまふ。

七面山 それでは重ねておたづね致しますが若し句主が各人各様の批評に支配されて自己の句作に對する信念を疑うが如き結果を招来しまして、句主本来の行き方をその批評

によつて根本的に変へたとしますなれば、これは川柳作家としてどのやうな結果になるかと思ひますが、この点は如何なものでせうか。

路郎 仮りに句主がそれ等の批評によつて自己の行くべき道を良く變へて行つたとしたならばそこに句評の價値が存在するわけであります。それ等の句評によつて仮りに從來よりも一歩誤つた方に踏み入つたとすればその句評は句主を損ねたことになる訳であります。

七面山 よくわかりました。弓削平 只今句評は自由である。良き句評が望ましいと言ふ結論になりますので句評する場合評者の感覺なり經驗によつて適正な批評を欠く場合もありませう。先達つての「北風に新聞配り」が押されて來るの句評にその北風が問題になり二つの異なつた意見がありましたが、御覽の通りの細長い山の町で弓削の柳人の子もすぐ眼前に彷彿としましたがが都会の方はそうでしたが経験がないので句の本當の感じを理解することが出来ない場合もあるのだと思ひます。

路郎 それはその通りです。こゝに句を評することのむづかしさがあるのです。句を評することも、句を選する

ことも同様であります。評者の經驗卓識の差がその作者の環境を充分に句を通して理解し得るか得ないかと言ふことになり批評は必ずしも同一点に到達するものではありません。各人各様の批評が生まれる所以であります。批評を讀まれた場合、これを讀んだ人達はそこにまた自分としての第二の批評、判断と言ふものが生まれて來るのであります。これは作句の日の浅い人、永い經驗を持つ人、それぞれによつても違いがあるから、これが正解であると言ふように考へた人があるとするれば、それは誤りである場合とない場合とがあるわけでありまふ。

七面山 先達つて先生に岡山でお目に掛りましたとき私が多少スラングに陥つてゐる点を指摘されましたのですがこのスラングの境地を抜け出すにはどうすればよいでせう。路郎 それは榮養を攝ることです。我々の生活に於いてヴィタミンBが缺乏したりCが缺乏したり色々な榮養が缺乏すると脚氣になつたり或は神經衰弱になつたりする。健康体に戻りたい、滋養たる生活がしたいと言ふならば、適當な榮養を吸収した後は日光浴、或は睡眠と言ふものによ

つて健全なる肉体、健全なる思想に立ち戻る事が出来るやうに、作句上のスラングに對しても同じ様なことが言へるのであります。毎日同じことばかり繰返してありまして、も句がスラングに陥ることもあり、仕事の方面からあまり過激である場合にも作句に空白を生じる場合があり、また、こうした場合肉体的には睡眠を擲ること日光浴を擲ることであり、思想的には自己の榮養になるべきものを讀むことが必要であります。七面山にお話中に睡眠を擲ること、とありましたがこれは句作を一時中止すること、解釈してはいけないうでせうか。路即ちそれは時間的の問題であります。数日間中止する場合で恢復することもあり、すし半月余りさうしなければならぬ場合もありませう。然し句が作れないと言つて漫然と日を見送つてばかりいては決して佳吟は得られない。丁度飛行機が滑走をして後に飛翔するように、たとへ少々平素よりもまづくとも作句を続けてゆくことは必要であります。たとへそれ等の句は發表に値しないと言ふだけであります。

鐵 兒 Ⅱ よくこの辺では課題吟が非常によい時は難吟が作れない。難吟がよいときには課題吟が駄目になると言はれて居りますが、私等も現在さう言うような道を歩いておりますが、これの原因は何処にあるのでせうか。また実際にさう言うやうなことがありま

路 Ⅱ 先づ課題吟と言ふことに就いて申上げると、課題吟は作句の練習としてやるものでありまして自己の創作の本来の姿は難吟にあるのであります。課題吟が作句練習として行はれることは申しましたが、課題吟の中にも自己の思想が可成鋭敏に働いてゐる作家の作品は第二義的なものであることは断言し得ないのであります。課題吟のうまい作家であつて、難吟が案外まづい作家もありませう。その相違について申上げますと、課題吟の中には自己の環境から生じた句と自己の想像から構成された句とがありまして、可成自由に詠まれるわけでありませうがそれだけに戯作的な作品や脱線した作品が生じやすいと言ふ弊害があるのであります。難吟になりますと自己の心境自己の社会観人生観と言ふものが極く強く表れて参りますのでその句の眞実性には強く迫つて来るものがあります。然しながらその詠む

内容があまりにも大きな感激である場合僅か十七音字の容器に盛り切れなくて失敗することが度々あるのを見受けるのであります。感激が大き過ぎる句に纏まらない場合燃焼不足の句が生れますのでむしろ課題吟の方がうまく詠めてゐるやうに思はれるのであります。

忠 義 Ⅱ 課題吟の場合出題の文字を入れて出題の意義とは多少離れたことを作句することがある。またその課題を充分理解してその字を使はずに作句する場合もある。現在どちらでも各選者の方はどつて頂いてゐるやうですが、どちらがよいのでせうか、先生はどうお考へですか。

路 Ⅱ 題が出題される以上その課題を充分に生かすと言ふことが必要である。單にその題を詠み込んでゐるだけでその内容が川柳的に秀れていないとするならば折角の出題も意義がないことになる。何故題を出すかと言ふことを考へてみますと多くの作家が作句をする場合焦点を掴むと言ふことの便宜上から題を出すのであります。実際に例を挙げれば、説明は少し的確さを失うかも知れませんが例え「僕」と言う題が出たとしても「僕は」「僕の」「僕に」「僕を」と言うふうにならば、

くつ付けて詠んだだけで題にははづれてはいないが、それは佳吟でないといふれば、そうした作句法は拙だと言はねばなりません。課題そのものは文字として詠み込まれてゐなくとも内容を確りと掴んで詠み込むよりも遙かに優れたものとなるのであります。ただこの場合その課題がないために、うつかりすると課題の内容から全然外に去つてゐる場合があります。

笑 泉 Ⅱ 句を自選することは我々のやうな年期の浅い作家には非常にむづかしい問題であるのですが、自選の方法について何か参考になるお話を願ひ致します。

路 Ⅱ 日の浅い作家にとつて自選の困難なことは言うまでもありません。然しながら或る年限に達すれば必ず自選する必要がある。その方法としましては、今日作句した句は十句あれば十句とも佳吟に見えるものです。然し翌日これを見ますとそれ等の句の中に甲乙が生じて三句位は捨てることが出来ます。更に一週間経つてこれを眺め又半月経つてこれを眺める場合、

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に
ノルモザン錠
大坂・武田薬品工業株式会社



近作 柳樽



想像にお任せします女です 廣島縣芳
明日飢えるとも貞操を強いんとす
惚れてゐる机が少し遠過ぎる
腹の立つ手紙どころか書いたろか
サーピスの唇痛い程吸われ
恋成らずともよし並ぶ事務机
チンドン屋今日は女房の櫛髻で出
親切にされて不安な一人旅 岡山縣苑
淋しい日マネキン程も塗つてみる
煙草吸う様にキスを軽んじる
共產党師を病んでる顔でなし
蟻の塔踏まずにくぐる寺の門
家計簿へノラになりたい昨日今日
祭の夜処女をさげし人に逢ひ 和歌山宏
病院にある夜線香などもいり
結局は人間だけの避妊薬
税金は滞納犬は飼つて居り
銀行は金庫のやうにドアをしめ
さればとて妻の入替まで出来ず
善良な弱きカッギ屋になつてゐた 石川縣光
倦怠期亭主ももうささいものうち
未亡人どの誘惑え傾かん
うすものを透して肉体美を誇り
病状を蚊の鳴く様な声で言ひ
嫁ぐ日の朝もレヴエーの眞似をして 貝塚市梵
宝塚結婚しても観るつもり 同

アベックで来ればよかつた草原よ
双眼鏡たゞ海原は波ばかり
手を抜いたとこを台風見逃がさず
銀行の窓辺で貧乏ちと忘れ 東京都東
雅量とゆふのが二号にも焼香させ
人裁く身になり過去がはすかしく
金銭のつながりあつて世辞ど知る
秋迄はもつまゐ女寝化粧し
食えぬから轉居する言はず行き 愛媛縣曉
虫の音は故郷と同じ旅に寝る
結局は女よ風にそよぐ葦
民主義校長さんも草を引き
足繁く来るは集金人ばかり 今治市文
只一つ撰るに女は手間をとり
無くて済む役所が出来る埋立地
戸を開けてやつても檻を出ない妻
二千弗用紙のように数へられ布 哇純
二千弗持つて根性が悪くなり
二千弗妻にも一度握らせ
二千弗持つて女を軽く見る
再婚はせぬが男は持つてゐる 津山市白柳子
情熱のおもむく所金が必要
眞実へ女は帯をどくと云う
純情な日もありました赤い爪
小松芳光君任帝展審査員を祝して
師の君も笑み給ふべし君が栄 金沢市陽
宿題はマ、の仕事のようになり
山に来てマ、は子供にいたはられ
もてる話したがる友が座り込み
倫落の一步を遺児に支えられ 大阪市春
唯運のよかつただけの地位につき
ストリップの娘もいるもん終電車 同



秋春筆雜

あの頃の人々

吉田 水車

二三丁うは氣封じに送られる

柳 樂

藥屋さんであつた西田柳樂氏は
藥學の方でも一方の大家であつた
し、川雜同人としても亦大いに名
句をものした。諸曲も得意で宴席
等では長唄とうたいの数似点を指
摘して演奏に及ぶ事もあつた。ま
だ大阪がサカンであつた頃よく淺
酌を共にしたもので、元伊勢町の
宅では字がまづいと短冊等で俳人
に劣ると何やら千字文を勝手に
にさかに紙屑の資料をこしらえて
居た。一枚もちうつもりで居た
のがとうとう貰ひそれこれた事は
残念である。
柳樂氏は酒はよく呑んだだけ共
そう強い方ではないようだった。
むしろ淺酌低唱の方だと思ふ。筆
はながく達者で特に藥學的に古
川柳を評釈しては川雜中の白眉で
あつた。川雜の百景記念句会の祝
宴の時の名進行係の記事を今読み
返えて見て名文と共に追憶新ら
たなことがある。藥屋さんと言は
ば岩崎奇可愛氏等「フンドシ」は
「ばかり作夏の色」と異色を示した。

その頃の名物的存在としては高橋
かほる氏があり「大阪は様か
けてもよい所」等あつて愉快だつ
た。句会で天位賞のチヤア台をと
つて、用意の風呂敷が間に合はず
悲鳴を上げた熊谷紅氏も居たし、
「借金」ともに人物出来かゝり、
の関本雅圓氏も忘れられぬ人であ
る。貨車の牛車戸をさして急ぐな
り」でならした朝田新水氏のカム
バックを祈つてやまない。「青春
はもののはすみを弁へず」健吟家
長崎柳秀博士、句会へは殆ど姿を
見せずそのくせ柳誌へはこゝに
しかも毎回相当の数のものをした。
「なりわいにうたてや人をかい抱
き」生田翠夢氏の面目こゝに全く
人情作家として異彩があつた。
「アドバルーン、アサヒビルと
のびて行き」戦後久しく見なかつ
たアドバルーンが納税勸誘にいち
早く上げられたのと対照して童心
豊かなあの頃の作品、作者は女流
作家として氣をはいた、竹内機見
女氏。
「折鶴靴のかじとがありません」
川雜の元老株橋本縁雨氏今尙健
吟、後進指導にいそしんで居られ
る。
「赤松の村がわたりを生んだ村」
福田山雨縁氏の右の句によつて川
柳の新使命をおしえられた。
以上の人々の内、縁雨氏、山雨
縁氏の外は今故人となられたり
消息を知り得ぬ方かしき方々で
ある。
今尙現役作家としていよ／＼川
雜のため氣をばいて居られる山雨
縁氏、縁雨氏、豆秋氏、鮎美氏、
没食子氏、白柳子氏、里十九氏、
夕鐘氏等々の事は割愛させていた
いく。
(二五・九・六記)

藥壘さげてマムシの香具師に立ち

同

役徳を居催促とは情なし

八代市斗四翁

疲れてる頭腦で女中日記書く

同

よく値切るあの癖だけで顔がうれ

同

祖母の泪がよく判る差押え

同

台風はそれたが都民税がくる

東京都蛙声

奥様の衣裳に見せた金廻り

同

濃き脂粉残し見舞の客帰る

同

貴婦人のシナもよろしく金魚居る

同

二年越し病んで聖書もおいてあり

姫路市富多葉

ミス・ボリスやさしいごまほめかし

同

ミス・ボリス手錠のスリルも味はスリ

同

年なんか問題じやない恋をして

同

見覚へがあるどばーさん話しかけ

愛媛縣曉童

ふとん繕ふ事に毎年うるたえる

同

セロハンをかぶせてもらう佛さん

同

知人初子を失ふ

同

柩覆ふ丈は一ツ身花錦紗

同

露路裏のこんな所に新聞社

廣島市巖

世が世とて異人の様な子が生まれ

同

たそがれて踏切りへ来た不安

同

うつふんは来た物賣へ怒鳴りつけ

同

捨猫の声に向ひも恋をあげ呉

同

ワンピース妹に呉れて嫁ぎゆく

同

来てみれば誘つた奴は来て居らず

同

三度目の花嫁高砂聞き覚え

同

世間より先に継母誤解して

大阪市葉光

ローソクの闇値が憎い夜の長さ

同

甘んじて尊き汗の日をめくり

同

坐つても立つてもせまる冷めた日

同

氣安さに置場わすれる空財布

同

親の苦もよそに二度目の感化院

同

迎え火にゆらぐ亡母のシルエット

同

ひたすらに我が道を行く老看守

同

官僚のあくを抜くにも苦勞らし

倉敷市千代男

味喰を提げマスカット持ち重い

同

補選また立会人をいうて来て

同

断水のバケツをさげて病が立ち

同

洗濯に男が来ると座り替へ

同

発信人あてゝ御覽さちらすなり

同

山日記こゝに始まるテント張る

同

車窓今故郷になる眼鏡ふく

同

口答せぬへ子心親心

同

ちとそつてテープを切つた良い男

同

教鞭を執る身が恋を地味にさせ

同

落書きをそつと消してる女教員

同

親の目に不良児正直過ぎるなり

同

あけすけな話他人の娘へはする

同

金持たぬ同志で駅へ雨宿り

同

暇な日のオフイス泰次郎に飽き

同

ニールツク三回拂とは見えす

同

ストリップ時代に育つ子を思い

同

生きている楽しみもなく納税し

同

税金が無情の風となる昭和

同

税金はさられおかみに叱られる

同

プギ嫌ふ母は明治の生れなり

同

台風と耳鳴り

種瓜平

台風前から耳鳴りが激しくてどうにも止まない。台風当日はバラツクの古トタンをめくる暴風雨の音と耳鳴りが氣も狂わんばかりだった。二抱えほどの大木が倒れて物置兼炊事場が全壊。風が変つていなかつたら一家下敷きとゆうところ。

これほどの衝動を受けても依然耳鳴りが止まないの、遂に連信病院の方正先生のところへいく。先生、自動車の警笛みたいに鼻から空気をブツブツ送つてから、私の顔をのぞき込み。

「顔が青いね。あんまり女をつくるから耳が鳴るんだ」
数名の看護婦さんがクスクス笑う。これは、翠光氏方で行われた句碑建立記念会の記事中で方正先生をカンピョウにたとえた報復であること明である。しかし、女遊び過ぎるといわれたことは、そ

うゆう見方もあるのかと思えば、更悪い氣もしない。
それでも耳鳴りはたまらないので、帰つてから近所のお寺の住職がアルバイトにやつている灸をすえてもらう。

「耳鳴ぐらい、治療中になをるよ。なに？ なに？ わしの耳の遠いのは年寄つとるさかいや」
老僧が懸念に灸をすえるが、一向に耳鳴りが止まない。こんどは鍼をはじめてみた。坊主頭をひ

れくりながら躍起になつて喉、肩、耳の周囲をアスアスやられるので

痛さと氣味悪さでとうと悲鳴をあげたが、坊さん、私の頭を掴んで離さない。私が止らないとゆうから片意地になつていららしい。後頭部から頭のてつべんまで針山のように突刺した後、私を横にし

たかと思ふ矢庭に足の裏の土踏まずへ灸をすえた。その熱かつたこと！ 長かつたこと！ 私はのけぞつて逃げ出すとするが、老僧が丸太を抱え込んだように私の足にしがみついて離さない。人氣の無い寺院内のことなので、私は殺されるのではないかとさえ思われた。それは鳥羽僧正描戲面の境地に見えたかも知れない。

牛殺じになつたお蔭で、その夜中に眼を覚ますと虫の音が湧えて再生したほろ嬉しかつた。祖母を起して平鳴りの止んだことを傳える。

「当り前じや、足の裏へすえるのは氣狂いの灸じやげ」
私は一本參つた。そういへば、こゝ二三日の私の行動は氣狂いじみていた。耳鳴りを止めようとして、頭から水を被つたり、夜中に裸で山の藪を歩き廻つたり、ドクダミを詰め込むやら、坐禪を組む

など大騒ぎだった。
キジア台風の危機が去つた頃、未だ少し残つていた頑固な耳鳴りもきれいに止んでしまつた。

原因は焼酎のためでなければ、女遊びなんでもつての外である。麻生先生の奥さんは天氣を予知されるそうだが、私の耳も台風を予告して警鐘を乱打してくれたのだ。どうも変だと思つていた。い

や、もう台風の恐れはありませんよ。と、私は人に語つてゐる。

耳の周囲をアスアスやられるので

五十過ぎ未だ処女です博士です
海水着姪もまぶしく見えるなり 同 廣島縣愛 鳩
横車税務署だけは効かなんだ
友にさえ足の遣のく借りがあり 同
肉附を足してやり度い知性の子 高知市一徹郎
父嚴と在つて貧乏ゆるぎせず 同
焼酎に孤獨たのしむ團扇持ち 同
魚釣の趣味をすゝめる債権者 大阪府きはち
あの頃はよかつた色のあせた服 同
風鈴に趣味なき人と将棋さす 同
廣告にしては豪華な手帳なり 大阪府恵 風
算盤を持たず手帳で計算し 同
マダムふと預けた子供思ひだし 同
靴から少し碎けた土産出す 大阪市春 峰
草臥れた帯で一生台所 同
樂屋裏ヒロポンを打つストリップ 同
勘方方の技巧も序に讀んで置き 佐賀縣えいを
古抱抱え税吏の型になり 同
手を振つて別れて行きし儘の友 同
和服着た看護婦別な声で来る 米子市雄々
新築に皮肉を混せて褒めて去に 同
病院の匂に馴れて病み続け 同
嘲笑ふやうに颯風まつしぐら 堺市太 路
颯風被害吾れに試練と云ふものゝ 同
姑を御送り申してからの柄 同
この熱に耐へよと今日も箸を取る 横濱市智 水
ルージュ濃きそれも世相のうちと 同
お祭りの太鼓うるさい歳になり 同
涼台八絃一字の團扇が出 岡山縣百 郎
ライバルの資産があるを口惜し 同
借金を拂う大事な梨が落ち 同
だしぬけのキッス戦後派驚かず 熊本縣月 仙
千円札ひつべぐやうにぬき出され 同
逢ふはいや逢はぬもいやと氣をさせ 同
クラス会税務署はさかる話が出 岡山市忠 美
電話つけ便利になつたは近所さま 同
メニユーの安い方へ方へ妻の指 同
愛人が来てゐて派手な寄附の高 熊本市安 彦
門原堂々プロレタリアを威圧する 同
脈を診る医者へ母の目する様 同
アンコールへコケイウシユな素振り見せ 新潟縣不 味
早耳が三次大戦を創作し 同
額帶鏡で覗けば美人の耳もゼロ 同
戦後派に老舗の欲しい世とはなり 岡山縣中山子
山小屋の在所を虹に教えられ 同
お務めは了りましたとトマト枯れ 同
その黒きく腫でうそをつき 岡山縣夢 成
酒の香へ坊主お経を早くやめ 同
返金に來たのに中からどなられる 同
スクーター同じように埃たて 布連市柏 葉
前垂れて来る日も近い米屋さん 同
ウインドーおでこを付けて見る所 同
妾見で後姿の自信もつけて出る 貝塚市無 骨
同行二人すゝきの原へ西陽落ち 同
大臣に言はすとそれがさういかす 同
素直さが妙に淋しい子の晝寝 岡山縣悠貴女
ビールも冷えました君を待つばかり 同
山はよし慾を忘れた姿なり 兵庫縣紅 山
スタイルを保つに電車立ちつかれ 同
雑草の根強さ中国立ち直り 三原市正 一
汽車の窓から拜まれる故郷の墓 同
長屋中ボスに頼つて暮し 愛知縣吐 平
蜜蜂の女王のような村のミス 同
蜜蜂の女王のような村のミス 同
仙用件の外に話題のない男 愛媛縣旭 童

柳人往來

戸倉 普天

「過去を語るは既に自らの老いを知る初めである」と楚人冠師が喝破して居られる。普天漸く老を知り初めた。いでもないが近頃蔵書の整理中に二三の古い手紙を見附けたので其中から最早時効を過ぎたものをここに御披露申して昔を偲び度いのである。

おはがき拜受(中略)小生も年来より春へかけて人手が無く無理をして來ましたので健康勝れず閉じこめて居ります。この處同病相憐れむの口でありませう。中央講演の隨筆面白く拜読致しました。あゝ云つた輕いもの、皮肉なものを用、雜へも御送稿下さい。からだは悪くても仕事がありまずので窮つて居ます。が其内寸暇を見つけてお邪魔させて頂きます。

昭和十四年六月五日

堺市出島三五一番地

路 郎

拜啓 栗を沢山送つて頂いて有難ふ。早速蒸してごも達と一語に賞味させて頂きました。

渡辺君へも割愛して御好意を倍にしました。目下雑誌の編輯で多忙忙亂筆御許し下さい。

昭和十四年秋(日附が無い) 麻生路郎

十九日の会御出席下さつたので皆さん大喜びでした。今も白面人さんが事務所へ見へてよく

來て下さつたと云つてゐられました。御座様で大変ゆかいな一日を過しました。なほ九州の御土産を頂き恐縮してゐます。大珍らしいので机上を飾つてゐます。

昭和十四年十一月廿一日

筑前橋川柳雜誌社

麻生路郎

以上が路郎先生の十年前の同じ年に下さつたお便りである。第三番目のはがきは同じ年の晩秋であつても此時は堺市から外へ轉居されてゐた様である。文中に出て来る渡辺さんの其後の消息は如何にや。同じく白面人さん其頃には既に白哲の美少年であつたと思ふ。末段の九州の土産物は何であつたらうか思ひ出せない。恐らく先生にももう御記憶に残つてゐないであらう。

御高老(私の祖母の意)いと御芽出度き事に存じ候共々御祝福申上候御依頼の御旨(此文字稍難解)早々に御返草申上可処多忙の爲め遅延致御氣の毒に存候誠にはつかしき愚戯輸入申候御閑暇も候はゞ御地御柳信など賜り度候

先は御といけまして

大正五年三月三日

吉川雄子郎

これは當時東京淺草区榮台町十八に住んで居られた吉川雄子郎氏から「五十鈴川漱をすれば鶯の声」の短冊一葉を頂いた時の手紙である。雄子郎氏は凡三十五年の昔井上劍花坊師の大正川柳誌を通じて私が柳交を得た川柳作家であつて今の文壇の雄吉川英治氏其人であ

餌代の計算もして釣に出る 同
此の部落芋あかつたハイキング 宇治市 同
園丁の如露へ静かに暮れかゝり 山田市 同
あの時の夢と此の妓の似てること 熊本縣 同
人間の弱さがふんだ百度石 同
金貸せと言はぬばかりの謎なりし 宮崎市 同
奥様が味噌や塩など借りに来る 同
金持つておいでと招く夏の山 兵庫縣 同
死んだ病室又死にそう顔が入り 同
虫すだく庭園税に困つて 愛知縣 同
この屋敷いつ建つことか虫の声 同
眞剣にまだ買えずいる 避妊薬 和歌山縣 同
無心状着きましたかどやつて来る 同
未亡人二度の勤めのハイヒール 貝塚市 同
絞められる朝も卵を産み落し 同
コスモスをたばねて試歩のあやめ 東京都 同
消燈のあさは月光浴えるまゝ 同
泣いた顔忽ち消したコンパクト 熊本縣 同
別荘で滞納整理案を練り 同
踊り輪が花傘廻るように見え 岡山縣 同
扶助料の娘踊りに加はらず 同
兄としてなら愛情を容れてくれ 大阪市 同
切札は女社長に魚心 同
ちとはやり出して往診誰なり 岡山縣 同
女中など使つてらくな未亡人 同
あたしだけ犠牲になれば食べらる 米子市 同
人形で思ひ出すので呉れてやり 同
人生へ未練の手記を残しとき 今治市 同
る二本海へ男のまゆをあげ 同
徴税の風がこの上吹くという 岡山市 同
病状はともかく酒が許されて 同
冬はズボンとかく女は便利なり 京都市 同

育ちゆくおしめのつぎも妻樂し 同
出教授は欠伸などめるのに疲れ 大阪市 同
さげしまれつゝもパンく義まれ 同
ちんばでも用をたして宿の下駄 廣島縣 同
大阪より廣島へ轉勤 同
轉勤のお蔭台風のくれたり 同
功勞と言へど賞状一つきり 大阪市 同
夕暮の海にサンダル忘れられ 岡山縣 同
夏季大学良識汗の如く消え 出雲市 同
坊 臆面もなく半ズボンから毛すね 愛媛縣 同
高野山参詣 同
宿坊の朝香煙と牌の音 兵庫縣 同
思ひ出の丘とは後添へ知らぬなり 富山縣 同
そんな事ないわあるわと母娘連れ 大阪市 同
惚れたのか惚れられたのか口の紅 鹿児島縣 同
秋風やへちまだらりと面白し 石川縣 同
子の變化嫁のせいだとやいてもみ 萩市 同
いなびかり妬心にゆがむ貌を刺す 奈良市 同
ピアホールラッッシュアワレ 奈良市 同
案山子の様な案山子を作ると父は言ひ 岡山縣 同
病弱の妻抱えて俺は一人旅 山口縣 同
舌打をする癖もつき十八九 徳島縣 同
恋人の前では喧嘩ひけもせず 鳥根縣 同
掛引が過ぎて逃した金もうけ 岡山市 同
駅時計修理中とはこゝろい 大阪府 同
練習をして来たやうな祝詞述べ 兵庫縣 同
いや〜と云ひながらにげもせず 大阪府 同
新妻の髪をいらつて見る氣もし 岡山縣 同
税務員開けつ放しを見て帰り 岡山市 同
闘病にあらゝニキビが出来ました 岡山縣 同
名刀があればこの恋たち切らん 出雲市 同
風子沢山玩具手製で間に合せ 廣島縣 同

るとは其當時には夢想すら出来なかつたのである。恐らく今の吉川英治氏にもこんな手紙や短冊を送つて下さつた御記憶も無いであらう。斯く申す私さへ後深く識して居つた此手紙を見るまでは全く念頭になかつた位であつた。今にして思へば當時の吉川さんの若かりし風格をかすかに偲び得るのである。若し失れ之れに因て旧交(?)を温め得れば尙更幸である

○ 普天君(前略) 僕に其資格があるか否かは暫く問題として兎に角其厚意には感謝せざるを得ない。君は丹波といふ我々から考へると直面目な意味に於て實際淋しい所だらうと思ふ。其淋しい友達とてもない処で矢張り我々と同じく川柳をやつて呉れるといふ事に就ても其意志の強固なのに驚かざるを得ない(中略) 非常に多忙なので惡筆のまゝ短冊を汚した。此句は今日の中央新聞の川柳懸賞募集(劍花坊邊)で一等になつた句だ(中略)

「善政の國史に興歎な文字がなむ」(下略)

紀元千九百十五年二月廿五日 川上三太郎

これは當時東京下谷区坂町十一高野方に住んで居られた川上三太郎氏の手紙の一節である。これ亦凡三十五年前の事であるから今の三太郎氏には普天の名さへ御存じあるまい。況やこんな手紙と短冊を普天が握つて居る事なぞ全然御存じ無いであらう。旧交再び懐に燃れば尙更幸である。

(前略) 單に水虫と申しても

種類がいろいろ有之由(中略) 今日には師生師の申に出ての御返事に止め置候

蟾の煮汁療法、匠者、瀧田大) 及素人より聞きましただけで自分が何等体験が有りませんが相当効果有るさうです。方治法は蟾のウデ汁で一日三回温浴治療する事リソール浴と同様です。蟾の煮汁は数回使用して差支ありません。手や足を温くめた汁に一回二十分間程浸けるのです。其後ボンパフといふ粉薬をよく塗擦して置かれ度し

昭和十六年七月八日 百拜

長崎仙太郎

これは當時の阪大醫學部教授醫學博士長崎仙秀先生から頂いたがきの一節である。川柳作家であり醫學の大家であつた先生の御指示であるから私は一所懸命此温浴療法を続けたのであつたが、実は足の水虫の方でそう簡単に治つて呉れなかつたのであつた。然し此水虫療法の御蔭で其年の夏から秋に掛けて連日離蟾の、蟾の汁煮に掛けた物であつたのを思ひ出す。今は亡き柳秀師に此文を捧げてせめてもの追憶としたい。



「二百四十三段——八つになりし年父に問ひていはく「佛はいかなるものにか候ふらむ」といふ。父が曰く「佛には人がなりたるなり」と。また問ふ「人は何として佛になり候ふらむ」と。父また「佛の教によりてなるなり」と答ふ。また問ふ「教へ候ひける佛をば何が教へ候ひける」と。また答ふ「それともまたさきの佛の教によりてなり給ふなり」と。また問ふ「その教へはじめ候ひける第一の佛はいかなる佛にか候ひける」といふ時、父「空より降りけむ土より湧きけむ」といひて笑ふ「問ひつめられて答へずなり侍りつ」と、もろ人に語りて興じき」と

と三馬の落語のような章で終つてゐる。

つれづれの大尾佛の根を残し
 タル 六四

こうしてあらゆることが書いてあるが、鰻のことは何とも書いてないの

兼好も鰻の案じはなかりけり
 武 七

序にこれは徒然草に無関係であるが、淨るりの「仮名手本忠臣蔵」に兼好が師直の恋文を代筆したということに脚色されてゐるので、

つれづれの外にまるらせ候も
 タル 二〇

書き
 タル 二五

つれづれはいゝがまるらせ候が
 タル 二五

の外十数句あるがこれは別の項とする。



古川柳と歌舞伎を彩る女(三)

水谷 竹 莊

八百屋お七

火の附いたやうにお七は逢ひたがり
 生壁はきつい毒だとお七云ひ
 振袖の羽織吉三が元祖なり
 本郷の火事に焼出された八百屋お七が、駒込の吉祥寺へ避難すると、そこに吉三といふ美男の寺小姓が御いでなすつてと言ふ話は、芝居の事で実は、吉三はそんな優男ではなく、湯灌場買ひの吉三といつてゲチゲチの小悪党お七の恋の文のやり取りの仲介から、例の隠れ事まで知つてゐるので、お七から小使銭をイタリ取りつてゐたもので、本当の恋人は当時この寺へ預けられてゐた麹町の旗本の次男小堀左門であると言ふのが実説に近い。

前表は火中と書きし封文
 封文火へくばつたで名を残し
 吉三へ送る文へ火中なぞと書添へたので、前表となりて終に身まで焼殺する事に成つて後の世まで消えぬ麗名を残したのである。

心中と云へばお七をめぐにとり
 八百七の時分は恋も律義也
 とさ米の中へお七は文を入れ
 耳の脇かき／＼お七そばへより
 耳の脇をかくのは、女形の羞恥を示す表情で

「耳の脇かきは芝居の女形」と云ふ句を具体化した句である。

八百屋お七が、火あぶりになつたのは十七の時分で、お七が火をつけて召捕へられ白洲で調べられた時、奉行は住所姓名を型通り尋ねた後、声を和けて「お七、そちア歳は十五であらうがな」ときいたそうである。

これはその時の法律では十五歳以下なら火放けも罪が軽くなるので奉行もお七を助けたかつたので、そういったのであるが、そんな事とは知らないお七はそれにすつかかりアガツてゐたので、これはうそをいつてはいけないと思つて「イエ十七で御座ます」とこの年齢の件が奉行との間に二三度も押し返されたが、お七はあくまで本當をいつたので流石のお奉行様もどうする事も出来なかつたのである。

若し刺らにやよいがとお七案じてゐる

吉祥寺泉母寺より面白い
 血腥い御寺より色氣つばい御寺の方
 が面白いとの意味の句と思う。

鬼も十八番茶も出花、その十八の番茶の出花を誰れにも賞玩させずにお七は十七を最後に土に還つていつたのである。

番町血屋敷のお菊

血のかはりにごんぶりはむこいこと

井と云ふ字に出来た血屋敷番町のお井戸で呼ぶ焼つき屋

夏の芝居に怪談はつきものである。そしてその怪談の中で凄く中に一種の色氣があつて、面白く且つヒヤ／＼しながら見てゐると、鎮夏の余剰氣分があつてよいのが血屋敷である。

そしてこの血屋敷と来ると、方々に傳説があるが、この番町のお化けが本當らしい。

しかし、血を九枚まで数へて、トドのつまりが井戸の中へ斬つて捨てられるお菊は、この傳説でも同じで、相手連れのお菊だけは変らないのである。播州にしろ、番

町にしろ、ともかく、芝居に上演される度毎に、冥途でお菊がほやいてゐる事である。

「いやだよ、又お血を数えるの、なんべん数へたつて一枚足らないにきまつてゐるぢやないの」

四谷怪談のお岩

秋の日に戸板がへしに干すお化この句は四谷怪談のお岩小平の戸板がえしを寓して洗濯の戸張を云へる句、お化とは離替へたり張直したりした古着の事である。

四谷怪談は江戸狂言から抜く事の出来ない大南北の傑作でその仕組、賣の道具も仕掛物の点で日本のお化け芝居の横綱格、女主人公のお岩は、故人になつた先代梅幸、関西ではやはり故人の右衛門治のお家藝であつた。

麻生路郎著 水武書房版

川柳研究したい人にも指導する人にも好適の書

々嘆評好

本書は著者が多年のウチンチを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して収むところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳としてゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價 一〇〇円 送料 金十二円
 取次御注文は 大坂市住吉区西五丁目二五番地 川柳雑誌社
 電話口番大坂七五〇五〇



窓 私と碑句 郎路生麻

僅か二三ヶ月の間に、私の句碑が三つも出来た。ジェーン颱風が誰も予想しなかつたように、私の句碑が次々／＼三つも建設されようなどとは私は、勿論のこと、誰も予想しなかつた出来事である。しかしこの出来事は颱風と違つて、誰の耳にも快い聲を傳えた。そして颱風のように快速調で事が運んで、終退する寸隙すら與えられなかつた。

二々昔も前の話であるが、私の句碑を生駒の山上に建てたいから句を寄げと云はれたことがあつた。しかし私が固辞したので、その事は沙汰止みとなり、私はヤレヤレと思つた。句碑建設の理由は、生駒山上の風致に一片の興趣をそそぐと云うのであつたが、私のような若者の句碑が山上に建設され遙に大阪を眼下に見下すことは鬱鬱の沙汰であると考えたので願ひ下げにしたのである。

しかし、この数ヶ月前に、私の句碑問題が惹起した時には、句碑に対する私の心境も多少変化してゐたので、よろこんでおうけしたのである。

私は私の生涯を通じて短詩川柳のために生きぬいて来たが、私の詠み捨てた句が、幾方あるうともそれらは新聞や雑誌や軍行本によつて世に送つたのに過ぎぬのであるから、流布ルートは單純だと云はねばならない。

川柳は大衆の胸底深く、グツグツつて行く詩であるともたら、そのルートが、新聞や雑誌や軍行本だけで充分であるとは云えない。私の頭に浮ぶのは大和路を放して期せずしてぶつかる多くの句碑や歌碑であつた。それ等の句碑や歌碑は世の旅する人達の眼前に、俳書や歌書のページを開いて句や歌を突きつけているのに等しいのである。それが誰の句であるうと誰の歌であるうとその時の旅人の胸底の一隅になごやかな情緒を波立たすにはおかない。それが名句であり、名歌である時、旅した人のその地に対する思慕の情を永く印するよすがとなることを思うと、一樹の下に、しようぜんと立つ一基の句碑や歌碑も決して無意義ではないと思えるのである。涼しさに四ツ輪を四つ渡りけりと云う句が、俳人でなくても知つてゐることは四ツ輪の句碑の存在的意義を強調しても不当ではなからうと思ふ。しかし、私自身の句碑に対して、そうした考へ方を押さつておくと云うのではないが、ホンの一部の人たちの共感を得たとしても、川柳文化運動の一步前進であることを強調したいのである。拙句の句碑建設を敢えて固

辞しなかつた理由がそこにあるのであつて、私自身の自惚れが句碑建設を寛受したのでないことだけは知つておいていただきたいのである。

第一の路郎句碑は大阪の

島の内三休橋の南詰を少しく西に入つた南側、中島小兒科診療院の後庭、藤の棚の下に建設された。句は、

すべりんこ親は涼しいとて待ち

である。大正十五年八月一日発行の「川柳雑誌」第三卷第八号の巻頭に、近作として発表された私の鳴尾時代の句である。第二の路郎句碑は奈良縣宇陀郡三本松村向瀬近畿日本鉄道室口大野駅下車北方一里余上田翠光居から十幾間下手に建設され、碑の前面はダリヤの花苗で土地は翠光氏の提供である。句は、

名も知らぬ山の起伏をうれしがり

である。昭和二十二年十一月十六日の作で、詳しくは廿五年九月一日発行の「川柳雑誌」の「句碑の句に就て」の記事を参照せられたい。

第三の路郎句碑は岡山縣久米郡弓削町弓削駅前の廣場に建設され昭和廿五年十月十七日午後四時に除幕式が行はれた。句は、

俺に似よおれに似るなと子をおもひ

であつて、特に弓削町と縁故のあ

耳鼻咽喉科 牟田病院

院長 牟田哲三郎
大阪市南区長堀橋交差点西・電話船場五〇〇〇番

る句を選んだ訳ではない。子ばんのうであり、子沢山であつた拙作を選んだ理由は駅前のことではあり、大衆の誰にでも判つてもらえると云う建前から、この句を選んだのである。

句は大正十五年七月十一日の午後兵庫縣鳴尾村字寺の後四番地の拙宅での柳談会席上の作である。

以上で句碑の句の戸籍調べを終つた訳であるが、この句は當時の「文藝春秋」で現代川柳の本格的なものであるとして推奨された句であることも附記しておきたい。當時の「文藝春秋」が手許にないので、どんな言葉で褒められたかは記憶していない。

川柳は俳句や短歌と違つて、幾ら句が巧くても、句碑に刻むのにふさわしくない句の多いことは短冊や色紙に書けない句があるのと同様である。

第一はその土地に縁故の深い句、例へばそこへ永く疎開してゐた爲に、その土地の良風美俗を詠んだものなどは適切であるうが、縁りのある句に佳吟のない場合には人情味を詠つたもので、何人にもうなづいてもらえなうな句を選

院長 牟田哲三郎

社 黒板

▼川維竹原支部では幹事弘津柳慶氏が下関へ轉勤されたので、新幹事として松井可美氏を推薦された。大阪市復興川柳文化祭が新教委主催で十一月廿六日に毎日新聞社三階大講堂で開催されることとなつたが此の締切までに、川柳園作協賛の詳細は決定していない。

不朽洞

会から

▼弘津柳慶氏は専賣公社竹原出張所から日本専賣公社下関支局へ榮轉された。黒川紫香氏は大阪府池田市東市場町一七八ノ十一へ移轉された。堀川不水氏(山口縣)は八月一日から開業した下関駅デパートに勤務された。三嶋美笑氏(米子市)は家業に没頭として、しかも税金の出さなうなこと、よき政治がのぞましい。川村好郎氏(東京都)はジェーン颱風のため大阪府高石町の自宅に被害があり、堺市の本社工場にも相當の被害があつたので帰郷されたが、同

伴の東京出張所員根岸氏が大阪で急逝したので遺骨を抱いて帰東された由。▼淡田久米雄氏(岡山縣)撮影の写真が岡鉄務組岡山支部機関誌「おかやま」三巻四号の表紙となった。なほ同氏は第九回夕刊山陽新聞記者文藝川柳の「ハンカチ」に庶務第一席(賞金千円)に入選された句は「老らくの恋ハシカチにしわがあり」▼中島鉄洲氏(鳥取市)の母堂が夏以來臥床されていられたが九月十七日午前四時永眠された法名は秋陽院光普智照大姉、行年七十三歳、謹悼▼



耳

尾崎方正選

大の耳もう責任の重さを出し年頃は機に耳をかたむける待つ耳へ小唄で帯る靴の音耳よりな噂へ色めく捜査陣あくせくとして耳に順ふ年さなり後添が耳を揃へて返済しハンケチに耳の赤さが染りそう早く起きては寝手がりの倦の耳耳打ちに堪確かなるエケケツトばあちゃん涙は耳がまだ聞えず耳そうじマツチの軸で無我に入り耳かきへ揃一ぱいの不精罷友達の縁談次々耳に入り

そば立てた耳にあはれな鐘一つ対談に耳の動くを見つけたり耳朶を染めて見合を意図する兄の毛ざり耳の上だけ残しとき薄命にして耳隠し好く似合ひクツションへ片耳折れてる疲れ吸ひがらと鉛筆大工は耳に置き暫くは耳だけ見える映画館きゝ耳になつて機の手がにぶり耳打ちの智慧俺の智慧程になく空耳で聞くだけの肚さまつてる姑或日耳のきこえぬ振りもする地獄耳もうごころから聞いてる耳ざわりだけ聞いて他人の愚痴遠目越しめがれ片方の耳をかり耳新しい説でもないが尤も開耳を立てて聞いている娘の瞳

紫風 一夜 葉 牛歩 一 革 米 逸 鐵 九 斗 苑 芳 卯 破 丁 中 福 相 子 山 雨 榎 氏

姑のせめて耳でも遠ければ病人の耳は微かな風をきゝはかなくも子の福耳をあてにして大黒様の耳の穴に蜘蛛が住み耳寄な話へ金持乗つて来ずもうお年でずと耳鼻科にみはなされ姑の耳聴えないものにするクレオン画矢鱈に太い耳が出来悪口は耳の遠さを知つてある驚いた兎片方耳が折れ紙幣を渡わだけや且旦那に栓もう耳に這入つたような顔である耳打ちも社長秘書と云ふタイプちと耳が遠く話の腰が折れ耳寄りな話彼奴が窓をした首飾り腕輪耳輪の娘が帯へり宿命の兎は耳にぶら下りつんだと云はれんが怒つて此耳で聞いたと互にもめてゐる福相の耳といはれて肩拾い

四案 葉光 花村 吐平 無骨 齊花 百郎 曉明 光郎 娛句樂 草一郎 陽々 直郎 安彦 孤舟 孤峰 鯨三 文柳 右郎 潤年

事務のペン耳に預けて説明し洋画館耳の聞えぬ人も来て耳だこになる程聞いた里自慢酒臭い息歌的に耳へ来る遺言は耳にきこえる声でなしチト遠くなつた山田のおばあさん耳飾り貞操料が高いのよ耳くそを掌に轉がして雨を見る耳もとで話せば首を振るばかり耳そうじ寝てるお客の向きを替えお下りの帽子耳まで這入りそう佳・税務署へ親爺ツンボになりまし佳・象の耳うちわのやうと綴方佳・理不盡へ微笑湛えた潰れ耳佳・馬耳東風分頭相繞控えたり佳・耳順われわがものさしの誤差を識る人・ひきつった耳原爆の影をみせ地・老眼鏡耳に故障のない返事天・聴えない事にしてゐる苦勞人軸・襟一寸直し耳貸す流行・妓方正

課題吟

曾根民郎氏(松本市)は俳誌「穂高」一「相似への俱れ」を執筆された▼服部十九平氏(岡山縣)は縣統計協会紙「ともし灯」の柳壇の選を担当された▼福田山雨榎氏

みどり

上六交叉点角西北

新会員紹介
上坂 茂(兵庫縣) 正
鮎美氏推薦

高純化肥料容器には断然！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪市大淀區長柄
四通一丁目四十四番
山銀株式會社
電話南川四四七番

ヒステリーな妻へガムでも噛まざるか
仲人も知りませなんだヒステリー
奴ヒステリーだとお先に失敬し
ヒステリー前の女房の愚痴が出る
ヒステリーの眼に薄情な人だらり
ヒステリーへ平然と亭主酒を飲み
ヒステリー愛すれば炊いてくれ
女房はヒスでも飯は炊いてくれ
ヒステリーこの頃もシゲ踏む快調
なあそれが更年期だよ云ひ逃れ
金詰りヒステリーとは別に寝る
ヒステリー結局金銭の事になり
ヒステリークローゼット今朝のお味噌汁
ヒステリーもう取あわや老けてゐる

雑川
東京支部句會（東京都）
八月二十七日　於島野ビル
川村好郎報

幕・五六人・衝立、つけ落ち・冷蔵庫・晝寢
苦蒸した先祖の墓にはけまされ
幕参り今日再縁の詫びに行く
五六人わめいただけの決議会
五六人首を切らうと云ふ会議
五六人買つて行つたが皆さくら
五六人顔役がいる草相撲
PTA五六人来て菓子を食べ
調員の盛況衝立邪魔になリ
衝立の向ふの客も好き同志
名人戦衝立一つの大廣間
衝立をおいて落つく新夫婦
つけ落ちのある勘定をまた値切り
附落ちをしらん顔して出る旅館
お酒二本附落ちしてる宿のつけ
附落ちへ老眼鏡を取り直し
冷蔵庫少うし邪魔になる九月
電気冷蔵庫でんと坐れど火の車
晝寢から覺まされてろり瓦斯会社
やりくりもつかずに晝寢してもい

恒明檜
野介
文蝶
同論
亞鈍
鮎美
生々庵
貴山
野介
晴峯
山雨樓
東夢
同
好郎
同
山雨樓
好郎
山雨樓
好郎
一郎
山雨樓
好郎
山雨樓
好郎
一郎
山雨樓
好郎
山雨樓
好郎
一郎
山雨樓
好郎

子と歩き愛

思ひ出もなつかしい道子と歩き 愛

100

番一九九五 島福話電
番四——番一三六五

亡き父母に孫を見せたい墓参り 北雷
ひざ枕して耳掃除させる身に 夢佛

川 愛知支部句會 (愛知縣)

九月七日 於久平居 津川竹坊報

裏口で虹を見つけた声になり 九坡
虹の立つ水鉄砲を押してやり 風來子
虹の橋脚へも声かけてやり 久米雄
腕白の子へお土産も出しそびれ 無聊
腕白も逸話にされている出世 大甲帽
腕白へ元氣がいゝと世辭を言ひ 紫郎
泣いて勝つ手口はヒスの母に似る 満年
腕白のふと姉さんが欲しくなり 九坡
腕白を英雄視される一人っ子 夢沙子
腕白が恋の勝利者とはなりぬ 茶々
轉宅へ先づ腕白が隣から 十九平
腕白を物語つて床のきず 中山子
叱られてせす腕白に二十才来る 久米雄
同窓で私一人が賣れ残り 夢沙子
母危篤停車の長い汽車に乗り 中山子
團体が揃はぬ後車ベルが鳴り 久米雄
受けるだけ受けよと下戸は罵られる 同
初対面好きが嫌いかと同はれ 七面山
白い服ルンペンそばに腰をかけ 茶屋平
二人きりのベンチへ婆さん来て休み 茶々
氣をきかされて迷惑な二人なり 大甲帽
満腹で行けば喰べよと並べたて 満年
迷惑な見合へ空が晴れ渡り 風來子
お役人ちと迷惑な酒になり 九坡
恋人の微笑は財布またたき 同
微笑しながら物の言えな仲 風來子
金のこと言えば微笑がささる消え 満年
微笑しなげかり氣弱な恋となり 九坡
輕蔑をした微笑を誤解され 満年
二人だけに解ればそれでいい微笑 久米雄
虫けらのように思はれ言はれても 淑郎
しんみりと三松松虫の音を交えて 大甲帽
佗び佳いチコロくくと油虫 満年

川 岡大支部句會 (岡山縣)

九月二日 於學生食堂三階 大森風來子報

本堂も旧主の墓もひびく荒れ 久平
福耳といはれながらも貧乏じ 竹坊
旅・嘘・料理・隅
旅の宿向ふ任ぜの膳につき 七面山
アベックが別々になる汽車の席 華
旅先で出した葉書が後につき 茶々
トラツクに荷物と共に旅役者 十九平
旅はよしこらで変わる國訛り 聰夢
今日の嘘昨日の嘘に似て疲れ 華
別れの氣女の嘘の白々し 満年
始末書の嘘八百の嘘びを入れ 聰夢
基会所の一言で妻嘘と知り 周平
嘘云へぬ男が遂に誠にされ 七面山
嘘にして女言訳聞入れず 健坊
話上手ごころ嘘か判らない 忠美
代書又程よい嘘をかかされる 聰夢
ばれて来た嘘へ序の嘘をつき 同
この嘘は通しやうと母は定め 茶々
ばあちゃんの料理を孫に汚ながり 壽子
料理家の娘料理に疎いこと 中山子
料理までアメリカ風はいやです 童飛子
料理屋の朝はカラシと猫がある 聰夢
附録料理入手出来ないネタでかり 忠美
此の料理貧乏し母子明日へ生き 彰三
手料理は夫に浮氣させぬ程 茶々
退散の時機と隅つこ心得る 風來子
校庭の隅轉入の子が遊び 十九平
日の丸句會 (鳥取市)
会社創立二十周年記念
八月一日 於縣中央兒童相談所 川村日澗子報
夕立・扇子・笑・海水・パス・日
ノ丸・二十年

夕立の中走らねばならぬ用 日澗子
思はざる長居に二度の俄か雨 をさむ
金策は出来ず扇子を忘れて来 八歩
氣ざはしく扇子とちたり開いたり 貴美女
サーピスの扇子妾宅へも届き 遊星
扇子もう破れ應援團つかれ 鐵洲
表彰は扇子一本貰ふて来 穂波芳
恋人はバツクミラーで笑つてゐ 芳道
掛取りに笑顔見せなと智慧をうけ 湖山
こびを賣る笑顔眞赤な花に似て 八歩
笑はれてゐるとも知らず長談議 芳道
先生も解らぬらしい笑ひやう 暢月
海水よ何処を限りに流れ居る 十字星
旅藝人パスにゆられてやつて来た 遊星
パス迄が五里あるさう義姉の里 芳道
パスが来て並んだ甲斐もなく押され 芳道
代燃のパス大空をくすべてる 芳道
全快の喜び妻とパスにゆれ 芳道
田舎での土産をパスで持てあはし 芳道
ロマンスの二人カトリを聞き漏れ 芳道
恩返しする日故郷のパスに揺れ 芳道
日の丸の扇静かに舞ひ終り 芳道
日の丸を親方にして吞み続け 芳道
拜んでも見たことある日章旗 芳道
屋上の國旗に今朝の風強し 芳道
二十年彦左工門で通して来 貴美女
死を覚悟した事もある二夕昔 柳窓
二十年夢のつゞきて借屋なる 湖山
こゝが父さんか二十年前おかしがり 吾柳
二十年勤め課長の下にいる 至高
解脫した顔小使の二十年 柳窓
二十年勤め争議の外に居る 穂波子
二十年勤めて今日の椅子廻る 天

留守番の役得として餅を焼き 迷路
留守番が鍵持つたまゝ居ないの 無名林
留守番を女中喜ぶ年令になり 同
留守番へちと込入った電話が来 生々庵
留守番に渡せぬ土産持ちかへり 拾舟
留守番の何苦勞なくひる寝して 同
はるばると来た母親に留守居させ 瑞川
留守番の父は初手から吞むつもり 瑞枝郎
風呂敷を括げる程に抄らす 鳥耕
風呂敷を括げる程に抄らす 迷路
念の爲風呂敷だけは持つて出る 一哲
経済は風呂敷包み持つてやる 瑞川
縮緬の風呂敷樂譜だけ包み 無名林
何気ない風呂敷包みの猫が泣き 生々庵
風呂敷に包み位牌を置き忘れ 拾舟
聞くとだに大風呂敷の厚いこと 一哲
國旗にも開米入れて末の世の 拾舟
風呂敷は持つて来たとも云ひおぼれ 無名林
退き沙でやつと二人になつたこ 同
アベックは白砂青松賞でもせず 一哲
片足だけ波にまかせる病上り 無名林
スタンドが海を照らして暮れて行く 路郎
海岸の魅力貝殻まで拾ひ 同

母袋未知庵著

川柳信濃國

信濃へあこがれを持つ人は多
いが、ホントの信濃を知つて
る人は少ない。先づ本書によ
つて江戸文学から、信濃を探
れ！ B6 200頁 二五〇円 二五〇円

發行所 しなの川柳社

松本市大名町七一

女客だけには留守居應接し 瑞川
八月二十七日 於生々庵居 醫師会川柳同好會 (大阪市)



編輯室にて

▼「川柳雑誌」が悠々と刊行されているので、好評を博し越して今ではワンダフルな雑誌になっているが、「川柳雑誌」では眞摯以外には策は無い。▼本誌の表紙「百貨店の見える風景」は山比種三郎画伯の煩はした。▼前号の拙筆「秋燈放談」は予想外の好評で、その反響の大きかったのに驚いている。▼本号は弓削駅前私の父三句碑の除幕式を記念する西日本川柳大会の記事や座談会記事で弓削号の趣を出している。▼月日が飛ぶように流れる。十一月号が市場に姿をあらわさぬうちに、もうセツと十二月号にかかつて。従つて本号で柳人の年賀廣告をお願いする始末である。(別欄廣告参照)例年以上に御高配を煩はしたい。(路)

静動

▼本社十月旬会は七日午後五時半から大宝文化会館三階で開催▼大阪通信病院柳会は十月廿一日午後二時から三階図書室で開催▼南区医師会文化柳同好会は十月廿四日午後七時から拾舟居で開催▼南海電鉄川柳会は十月廿四日南

海高等学校階上で開催▼千石莊文化部川柳会は十月廿二日午後一時から開催以上何れも路郎主幹出席▼川柳岡山支部旬会は九月廿三日弘済会ハウスで開催▼川柳備前支部は九月廿三日娛句樂居に於て開催された▼川柳岡大支部旬会は十七日岡山大学学生食堂三階で開催▼裸体美術展協賛川柳大会(岡山市)が十月八日川柳岡山支部で開催され盛会だった▼弓削川柳社から昭和廿五年九月十七日に句集「川柳町」第一輯が刊行された、プリント五三ページ、非賣品▼阿蘇川柳会(熊本縣)では九月廿三日午前十時から國立公園大阿蘇火口山上茶屋で川柳大会を開催された▼小川青泡氏は「あぢさい」一巻(プリント)を刊行された(大牟田市小川町一五九)▼千石莊川柳会(具塚市)では故千原原司氏の三十五日の翌日に、サンルームで庸司追悼小集旬会を開催したと▼柳翁忌、村上源氏忌旬会(愛媛縣)が九月廿三日夜、津倉五十四番札所の延命寺で開催された▼川柳拳骨吟社(福岡市)では大神梨雨江氏還暦祝賀川柳大会を十月廿二日午後一時から福岡市中島町消防会館で開催された▼田中梢風氏(熊本縣)は颱風で農作物に多少被害があり、「百姓はなるほどバクチキジャ過ぐ」の句を寄せられた▼根岸東夢氏は川柳東京支部で幹事川村好郎氏の片腕とした活躍されていて、過般のジェーン颱風で島野自轉車株式会社界工場に相当の被害があつたので來堺中大阪で腹膜炎で急逝された。謹んで悼む。▼山川季賀氏(廣島縣)は九月廿四廿五日に滋賀へ帰省された▼丹波太路氏(堺市)

最短時間 大阪・名古屋

毎日3往復

特急料金 ¥600

特急上町發 7.40 13.40 16.40

名古屋發 8.00 13.00 17.00

近畿日本鉄道

酒服用紙コップ アイスクリーム用紙コップ

大阪市阿倍野区晴明通一丁目

特殊紙器工業株式會社

フタバカップ株式會社

電話 天下茶屋 二八〇二番

二八〇三番 二三九一番

風趣豊かな お好み會堂

おなじみの「食道樂街」七階

◇てんぷら◇とんかつ

◇中華料理◇お酒

◇ビール◇ジュース

(外食券食當)

茶屋「甘樂」開設

松坂屋 大阪日本橋

Made in Occupied Japan

(転載禁)

牛ヶ年概算 金一九八四

一ヶ年概算 金三九六四

昭和廿五年十月廿五日印刷

昭和廿五年十一月一日發行

大阪市住吉區内河内町五丁目二五番地

行印人 麻生 幸二 郎

發行所 川柳雜誌社

電話 大阪 七五〇五〇

〒550 大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

洋館(十句) 寺井鋭々選

女形(十句) 水谷鮎美選

近作柳樽雜誌廿句 麻生路郎選

川柳塔(雜詠) 麻生路郎選

文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の雅吟を募る。

▼「川柳塔」への投句は不朽詞會員に限る。

B列5号 毎月一回一日發行

川柳雜誌 第五卷 第十一号

一冊 金三〇円 (送料三円)

金一九八四

金三九六四

昭和廿五年十月廿五日印刷

昭和廿五年十一月一日發行

大阪市住吉區内河内町五丁目二五番地

行印人 麻生 幸二 郎

發行所 川柳雜誌社

電話 大阪 七五〇五〇

〒550 大阪 七五〇五〇